

## 自閉症児就労訓練について

佐々木啓太（知的障害者通勤寮拓心館 生活支援員）

### 1. はじめに

当施設では、主に高等部の自閉症児を対象にした就労訓練を行っており、今年で3年目となる。第4回目の訓練の情報を主にお伝えすることで、自閉症児就労訓練を紹介したい。

### 2. きっかけ

就労を控える自閉症の方々に、年2回（夏休みと冬休み時）、5日間の就労訓練を行うことで、一人ひとりの特性を知り、就労に必要なスキルを少しずつでも身に付けていけるよう支援を行っている。そうすることで、個人にとってのよりよい環境を探り、学校から一般就労へという大きな環境の変化に役立てることができるようになりたいと考えた。

### 3. 参加者

養護学校、特別支援学校在籍中の自閉症児（主に高等部）5名。

### 4. 場所

- ・知的障害者通勤寮 拓心館（4名）
- ・就労移行支援事業所就労サポートひろさき（1名）

### 5. 作業内容

- ・広報誌発送作業
- ・銅線作業

### 6. ボランティア

弘前学院大学学生に依頼した。ボランティアをマンツーマンで配置し、観察していただいた。できるだけ5日間同じ参加者を担当してもらった。

### 7. 事前準備

#### (1) アセスメントの実施

①家庭：参加者の母に拓心館に来館していただき、聞き取りという形でアセスメントを行っている。前回まで参加していただいている参加者に関しては、アセスメント用紙を作成して送付し、近況を中心に記入していただいている。

②学校：各参加者の担任の先生から、学校で取り組んでいることや本人の最近の様子を伺った。

①②の内容と前回までの参加者の記録を活かし、個人に配慮した環境を設定した。

#### (2) ボランティアとの打ち合わせ

弘前学院大学を訪問し、各参加者の情報を伝えた。

### 8. 訓練の状況

訓練は弘前駅に集合し、ボランティアと共にバスにて拓心館へ向かうことから開始とした。通勤も訓練に含めることで、より就労に近い形を求めた。拓心館到着後は各自のスケジュールに沿って活動した。以下参加者の一人、Aさんを例にして紹介する。Aさんの当日のスケジュールは右の図の通りに設定した。

Aさん		
8:35～	『拓心館』到着・着替え	<input checked="" type="checkbox"/>
8:45～	訓練始まりの会	<input checked="" type="checkbox"/>
8:50～9:45	仕事	<input checked="" type="checkbox"/>
9:45～10:00	休憩	<input checked="" type="checkbox"/>
10:00～10:45	仕事	
10:45～11:00	休憩	
11:00～12:00	仕事	
12:00～13:00	昼休憩	
13:00～14:00	仕事	
14:00～14:15	休憩	
14:15～15:00	仕事	
15:10～	着替え	
15:20～	帰りの会	
15:25～	バス停に行く	

訓練中に行ったことは以下の通りである。

- ・一日単位のスケジュール表で流れを伝えた。  
⇒見通しが立っているかは判断し難かったが、不安行動が見られず、自ら確認し動いている様子から、混乱はなかったように見られた。
- ・終わった項目にはバツをつけ、次にすることを確認するよう習慣づけた。  
⇒学校で取り組んでいたこともあり、次の行動を確認するにあたって役立っていたと思われる。
- ・終了の時間はキッチンタイマーを使用し、音によって次のスケジュールへの移行を促した。  
⇒スタッフが時間を設定し忘れた際に、キッチンタイマーを差し出してきている。その意味を把握できているように思われた。
- ・1日目は広報誌、2日目以降は銅線作業に従事してもらった。
- ・作業は手順書を基に手本を見せた。  
⇒4～5回の手本で工程を理解し、手順通りに取り組むことができた。また、積み重ねる程に集中時間（ひとり言がみられない時間）が長くなった。
- ・銅線作業では、力加減等、自分なりに調整して取り組む姿勢が見られた。  
⇒手順にオリジナルは見られず、手順の中でやりやすいやり方を模索できていた。
- ・他者の動きに気が向きやすいので、パーテーションにて他人に気の向かない空間を作成した。  
⇒あご打ちや太ももを叩く回数が減った。作業効率が上がった。
- ・声かけによる促しがなければ報告することが難しかった。  
⇒「終わりました」「どうせんください」カードを作成。読み上げながらカードを渡すことで適切な言葉の使い方の理解と、伝える相手を理解してもら

うことをねらいとした。徐々に一連の流れとして捉えてくれ、最終日には自分から報告することができていた。

- ・ 仕事中ダンボールや軍手のくずなどの異食が見られた。

⇒原因として①口内感覚を楽しんでいる②ゴミを目の前から消したくて口に入れる③習慣化された行動の3点を推測し、②であることを想定して対応した。作業机に、「・ガムテープ・軍手のゴミ・ちいさい紙を入れる」と記した箱型のゴミ箱を設置した。取り入れた際からあご打ちが多く見られ、あご打ちが少なくなった時には、異食が多く見られるようになっていた。用意した箱は、銅線ビニールの細かいクズのみを入れる箱になっていた。

- ・ 仕事で出たゴミを自主的に片付けてから次のスケジュールに移ることができた。

- ・ ペットボトルのジュースを配分を考えずどこまでも飲んでしまう。

⇒お茶のペットボトルに『ここまで飲める』と線を引き、決められた分量を飲んだら直ぐに冷蔵庫にしまうという方法をとった。繰り返すうちに、線が引かれた場所まで飲むと、自発的に冷蔵庫の中に入ることができていた。

## 9. 訓練後の対応

### (1) 各家庭との反省会

後日、各参加者の母親と反省会を行い、参加者の訓練中の様子を伝えると共に、ご家庭からの訓練の感想を伺っている。また、次回訓練への希望も確認している。

### (2) 学校への報告

各参加者の学校を訪問し、それぞれの担任の先生へ訓練中の参加者の様子をお伝えしている。

## 10. 考察と今後の展望

これまで4回の訓練で、参加者それぞれの「自閉症らしさ」や、どのような環境の整備をすれば「自分らしく」働くことができるのかを知り、就労に必要なスキルを少しずつでも身につけていければという思いで取り組んできた。徐々にではあるが、「具体的にどうしていけばよいのか」という部分にも力をいれることができてきている。第四回自閉症児就労訓練を終えた段階での反省や気づき、今後の展望を以下のようにまとめた。

### (1) 連携

保護者：回を重ねるごとに、積極的な意見が多く聞かれるようになってきた。具体的な希望も聞かれるようになり、保護者の方々から必要とされている訓練になってきているように感じられる。保護者の意見を汲み取り、より充実した訓練につなげていきたい。

学校：5日間の短い期間の訓練では、新しい取り組

みをすることは時間的に難しい。学校での状況や効果的と思われる取り組みを教えていただいたことで、訓練に活かせる部分は多かった。中でも、実習を終えた児童の実習先の評価を教えていただけたことは、訓練中の課題設定をより明確にして取り組むことにつながった。

今後も両者との信頼関係の構築を図りながら、情報交換を密にし、就労訓練の機能強化へとつなげていきたい。

### (2) ボランティア

弘前学院大学のボランティアサークル「知的発達障がい関連勉強会」へ依頼している。訓練内容充実の為にはボランティアの質の高さは必要である。以前よりボランティア養成のための勉強会の必要性が検討されている。青森県自閉症支援研究会弘前地区部会と連携して、この課題に対応していきたいと考える。

### (3) 工賃

第4回の訓練では、銅線のビニールむき作業を中心に行なってもらった。1グラム辺りの値段を調べ、むいた銅線のグラム数に応じて工賃を支払った。しかし、銅線作業を行っていない方や、一部の工程のみ参加した参加者もあり、このような場合には、他の参加者とさほど差がない額の工賃を支払う事とした。工賃について予め規定を設けておく必要があったと懸念される。また、参加者が「工賃は仕事を行ったことでもらえる報酬だ」と認識できているかについても疑問が感じられる。「最終日にお金を貰う」ことは理解できているようであったが、これがどのような意味をもったお金なのか理解できることで、より作業へのモチベーションを上げることができないのではないかとと思われる。また、そのことで「働く」ということへの理解に一步近づくのではないかとと思われる。工賃理解の仕組みについても工夫を図っていきたい。

以上のような気づきを次回へと活かしていきたい。参加者それぞれの自閉症らしさを理解し、一見働きにくさとして表面化されている部分を支援することで働きやすさに転換する方法や、環境設定の工夫で参加者が落ち着いて働くことができるようであれば、その方法も見出していくことがこの訓練の役割であると考えている。そしてこの情報を関係者同士が共有し、将来の働く場面での参考になる情報として蓄積していくことが必要と考える。また、参加者自身働くことへの興味を深めることも、訓練を行う意味の一つとして捉えている。

自閉症児の就労訓練のスタッフとして、これまで以上に幅広く、深さあるネットワークを構築していきつつ、知識と技術の向上に努めていくことで、より専門性の高い支援ができるよう取り組んでいきたい。